

## 審査の結果の要旨

氏名 中澤 渉

公立高校の入試改革は長年にわたり、日本の教育改革の主要なテーマの一つをなしてきた。1980年代以後盛んに導入されるようになった推薦入学制度も、そうした改革の一つである。だが、推薦入学制度が、どのような経緯で導入され、いかに普及し、改革がめざした意図通りの成果を上げたかどうか。こうした教育改革の政策評価につながる実証研究は、これまでほとんど行われてこなかった。

そうしたなかで、本論文は、推薦入学制度の拡大普及という現象に焦点を当て、この制度がいかなるメカニズムを通じて普及したのかを解明すると同時に、改革がめざした意図とは異なる結果が、選抜の過程で生じるプロセスを実証的に明らかにすることで、教育改革をめぐる政策研究に寄与しようとするものである。

本論文は、6章よりなる。1章では、教育改革の政策研究として、推薦入学制度を取り上げる理由を示し、さらに「政府の失敗の社会学」、「ミクロ - マクロリンクに関する合理的選択理論」、「政治過程論」について先行理論の検討を通じて、分析枠組みを構築する。2章では、推薦入学制度導入を歴史的に検討し、職業科への導入と普通科への導入とでは異なる政策意図があったことを明らかにする。3章では、推薦入学制度を推進する際に用いられたロジックを、審議会答申、国会答弁、新聞紙上の言説を分析することで明らかにする。その結果、「個性化」をめざす教育の論理が、推薦入学制度推進の論理として用いられたことが実証される。

これらの分析をふまえ、4章、5章では高度な統計分析を用いた実証研究が展開される。4章では、推薦入学制度の普及メカニズムについて、職業科と普通科のそれぞれに都道府県を単位としたイベントヒストリー分析を行い、職業科では競争原理が働きにくい場合に、普通科では競争原理が働きやすい場合に、導入が促進されることが示される。5章では中学生、高校生を対象とした質問紙調査データを用い、どのような特性の生徒が推薦入学制度を利用し、合格したのかをピロビット・モデルによって明らかにする。その結果、成績上位者を受け入れる「進学校」では推薦で評価される「個性」をもった生徒が選抜されるが、職業科や進路多様校では成績の影響が強く、「個性」の影響が弱いことが示される。最後の6章では、これらの知見をもとに、教育改革において「意図せざる結果」が生じるメカニズムについて、マクロ - ミクロリンクの視点から検討が加えられ、教育改革が教育理念の自己目的化に陥りやすい点が理論的に明らかにされる。

以上のように、本論文は入試改革を対象に、これまで理論的・方法的に十分な確立を見ていない教育改革の政策研究に新たな理論と方法を提供し、さらには選抜結果までを組み込んだ選抜研究の可能性を示すものとして、今後の教育研究に貢献すると考えられる。これらの点から、博士(教育学)の学位論文として十分な水準に達していると認められる。